



文學博士久松潜一著

萬葉集に現れたる日本精神

東京 至文堂

三協印刷株式會社

序

昨年の春から今年の春にかけて歐米文化の巡禮者となつた私が、念頭に去來したものは日本文化わけて日本文學の特質は何であるかといふことであつた。それと同時に日本文化や文學が西歐に如何にとり入れられて居るかといふ點も私の關心の的であつた。さうして萬葉集が世界の代表的文學作品と考へられつゝある現状を知つて愉快に堪へなかつた。

歸來ラヂオの朝の修養講座に於て萬葉集に現れた日本精神を講ずるやうに請はれたので、いさゝか感ずる所をのべたのである。本書はその時の覺書にいさゝか筆を加へ、更に從來雜誌等に發表した萬葉集に關する雜筆九章を添へて、こゝに小冊子とすることにしたのである。本書をまとめたに就いては日本の古典萬葉集を日本國民の出來るだけ多くの方々に知つていただきたい微衷であるとともに、私にとつて別の思出もあるのである。

日本を離れて私はまもなく五歳になる愛兒明子を失つた。明子の死を報ずる便りは故國からの最初の便りであつたのである。私の心はくだけるばかりであつた。たゞ故國の知る人々の恩

情と私の理性とはくだけんとする心をわづかに救つてくれた。私は亡き子の靈と常に二人ある如き心持で歐米の遍歴をつゞけた。ラファエロのマリヤの畫を見る時にも、ベニスのビヤツサンマルコの鳩の群れを見ても吾子の面影はあり／＼と浮んだ。私は稚き子の思出として小さい美しい本を作つて亡き子の靈にそなへようと思つた。この書とやがて世に出したい遊歐隨筆「西歐に於ける日本文學」とはさうした私の思出のもとにまとめたのである。これをはかなき事と笑ふ人は笑つていたゞきたい。私は一人の日本人として日本文化や日本文學を愛し、その特質や精神を考へるとともに、一人の弱き人間として稚くして世を去つた亡兒の冥福を靜かにいのりたいのである。

昭和十一年十二月三十一日

久松 潜 一

目次

萬葉集に現れたる日本精神

- 一 萬葉集と「まこと」……………一
- 二 萬葉集と敬神……………九
- 三 萬葉集と忠君愛國……………一九
- 四 萬葉集と親子の愛・家の尊重……………二六
- 五 萬葉集と自然の愛……………三七
- 六 萬葉集と和の精神……………四六

萬葉集雜考

- 一 眞實なる感動……………五五

二	萬葉集の歌人	五九
三	柿本人麿の歌	七七
四	山上憶良の歌	八五
五	萬葉集の季節感と年中行事	八九
六	東歌に關して	一二五
七	萬葉集の歌枕	一三八
八	萬葉集の歐語譯	一四四
九	萬葉集と世界文學性	一四〇

一 萬葉集と「まこと」

私はこれから萬葉集を通して、日本精神即ち日本人としての道や理想の一端を御話して見たのである。

萬葉集はいふまでもなく日本の古典文學の中、最も尊重すべき作品の一つである。日本民族の眞實なる感動が率直に力強くうたはれて居るのである。さうして日本精神は日本人が肇國以來有する理想であり、日本人の道である。古くから言はれて居る言葉で言へば日本魂である。もう少し具體的に申せば「まこと」の精神を根柢として、敬神と忠君と愛國の精神とが渾然と一になつて居る境地である。さうして忠と孝とが一體になつて、忠を行ふことが孝となり孝を行ふことが忠となるといふ境地である。而もそれが國家、國民全體の和の精神の上にたつて居るのである。さういふ精神こそ、日本民族が幾千年來理想として來た道であり、また立派に實現されて來たのである。さうして今後も永遠に實現されてゆくことを疑はない。

萬葉集は日本人の眞實な心がうたはれて居るのであり、従つて萬葉集には日本民族の道や理

想が力強くうたはれて居るのである。大和魂が脈々として萬葉集の歌の中に生きて居るのであり、日本精神が萬葉集の一首一首の中に現れて居るのである。

そのためにこそ萬葉集は千數百年前の歌であるに拘らず我々の心に生きてうつたへるものである。

さて日本人としての道、日本民族の理想となつて居る點を挙げればいろ／＼の點があるが、第一に、その根柢となるもの、即ち日本人の心構へとなる點として、「まこと」といふ精神を擧げたいのである。人生に於て私は「まこと」ほど尊むべきものはないと思ふ。我々は少し位愚であつても決して耻づべきことではない。しかしながら「まこと」のない人間であつてはならない。「まこと」のある人こそ眞の日本人である。「まこと」は「眞心」の現れである。近世の學者富士谷御杖によると、心を私心、一向心、眞心等に分けて居る。私心は利己本位な心である。一向心は感情本位の心で純な所はあるが、一方に偏するのである。公心は理性によつて行ふ正しい心ではあるが、人間的な情味がかけて居るのである。眞心は理性のみを主とする心ではなく、感情と理性とが調和して居る心である。人情もあり、而も理性から見ても正しい心である。かういふ眞心の現れが「まこと」である。従つて「まこと」は眞でもあり、善でもあるの

である。かつそれは美でもあるのである。日本の文學は古來「まこと」を理想とし、こゝに美があるとして來たのである。近世の俳人の鬼貫も俳諧は「まこと」であると言つて居るが、萬葉集を尊重した賀茂眞淵、古今集を重んじた香川景樹も、文學の中心に「まこと」をおいて居るのである。かくて「まこと」は眞であり善であり美であるが、而もそれ／＼が別々にならないで一に渾然と融合した境地である。智と情と意との一になつた境地である。古く日本民族の理想を現す言葉として言はれて居る清明心、もしくは明く淨く直き心といふのはこの「まこと」の精神であるのである。明くといふのは智慧であり、淨いといふのは情であり、直きといふのは意である。明く淨く直き心はやがて智情意の圓滿具足した境地であり、「まこと」であるのである。この「まこと」といふ境地は必ずしも日本民族のみの理想ではないと見る考もあらう。たしかに人間に共通した點もあるが、しかし眞善美のこれほどに渾然と融合した境地は他の國民には容易にみだし難いのではないかと思ふ。本來分析をきらつて綜合的に物ごとを考へる日本人にしてはじめてこの眞善美の一體となつた「まこと」の境地を得るのではないかと見られる。かくて私はこの「まこと」こそ、日本精神の根柢となり、地盤となつて居るものであると考へるのである。私どもの一切の行爲も言説もこの「まこと」から出發しないものは人を動か

することが出来ないのであるし、すぐれた文藝の世界も得られないのである。たと器用な歌、小手先きの文藝は到底人の心を動かすことは出来ないのである。たとへ一時の流行によつて器用な小手先きの文藝が重んぜられても、やがてそれはあかれてしまふのである。眞に永遠な文藝、不易な文藝はこの「まこと」のある所にあると思ふ。萬葉集の永遠性は實にこの「まこと」を根柢として居る所にあると考へる。

私は二三首の例を萬葉集から擧げてこの「まこと」の意味を敷衍して見たい。

たび人のやどりせむ野に霜ふらばわが子はぐくめ天の鶴群（卷九）

この歌は天平五年遣唐使に従つて支那にゆく人の母親が我子愛する餘りに歌つたのである。遠くゆく旅人のやどるであらう野に霜がふつたならば、天とぶ鶴の群ようか我子をはぐくんでやつて下さいといふ意味である。天とぶ鶴に我子をはぐくんでくれといふ點などは空想的に見られるかも知れない。しかしさういふ空想的な事柄を通して母の子を思ふ「まこと」の情が切々として見られるのである。遣唐使に従つてゆくほどの人物であるから成人した人であ

らうと思はれるのに、なほかういふことをうたはずには居られない所に母としての愛が見られるではなからうか。文藝に於ける「まこと」は必ずしも材料の上では想像をさけない。しかし如何なる空想的な事柄をうたつても、その中に「まこと」がある所に文藝として生きて來るのである。前に申した香川景樹といふ歌人も、歌の調を重んじて歌は調が根本であると言つて居る。所謂事實でない虚を材料としてうたつても、その調の中に「まこと」が現れるのである。親が子どもをしかつて、馬鹿とのしつても、その馬鹿とのしる調、即ち調子の中に子供を愛する親の情、親の涙が現れるのである。それが誠實であり、「まこと」であるのである。

更に一首を擧げると、

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば（卷六）

といふ歌がある。この歌は天平六年に海犬あまのいぬかひのとも養岡鷹といふ人が聖武天皇の詔に應じてよんだ歌であるが、この歌をよむ時に、平明な中に國民として國の榮えをことほぎ、その中に生きる喜びを心から感じた真情が見られるのである。この歌が萬葉集の中でも特に愛唱されて居るのは、

さうした日本國民としての眞實な情が少しも飾らずに出て居るからである。この歌には思想として國家をことほぐ心持が見られるのみならず、この歌の調子の中に、自らそれが感ぜられるのである。それでこそ眞の歌としてもすぐれて居るのである。歌全體の中に國民の「まこと」がにじみ出て居るのであつて、それが人をひきつけるのである。

かくの如く國家に對し、子供に對して、いなく「まこと」の心が一切のものの上に、無限の愛となつて居るのである。更に萬葉集の中から夫婦の間の「まこと」の現れた歌の例を擧げると、旅にゆく夫に對する眞情をうたつた歌^註がある。長歌の大意をあげると他^{よそ}の夫は皆馬に乗つて山城路をゆくのに、自分の夫だけは徒歩でゆくのを見るとに心痛く堪へがたいので、結婚の折に母から形見にもらつたますみの鏡や、美しい領巾^{ひれ}即ち肩かけのやうなものを以て金にかへて馬を買つて下さいといふ妻の純情をうたつて居るのである。いかなるものにもかへがたい母の形見をも夫のためには少しも惜まない妻の「まこと」の情に對しては、夫も

馬買はゞ妹かちならむよしゑやし石はふむとも吾^あは二人ゆかむ

とこたへるのである。馬を買つて自分だけは乗つても、妻がかちでゆくのはいやであるから、たとへ石はふむとも二人はとも／＼に歩いてゆかうといふこの夫婦相互のまことの心の發露によつて、美しい夫婦の愛が完成されるのである（後の山内一豊の妻に見られるやうな美しい心の現れである）。これこそは萬葉集に現れた「まこと」である。自分自分の欲望をそのまゝにうたつたのでは、眞の「まこと」ではないのである。他人の氣持を顧み、互にゆづることによつて眞の自己の實現も出来るのである。智情意の圓滿調和した世界、眞善美の一となつた境地に於て人生の眞實なる道がひらかれるのである。それが清明心であり、「まこと」であるのである。

四千五百首に近い萬葉集の歌はかういふ「まこと」をうたつて居るのである。それは古今集にしても新古今集にしても、更に、日本の多くの文學にしてもこの「まこと」を根柢に有して居るが、これを優美の情緒でつゝんだり、幽玄の世界の中で現したり、或は複雑な思想や事件のもとに表現して居るのに對して、萬葉集は最も素樸に最も純粹に最も熱烈にこの「まこと」をうたつて居る歌が多いのである。「まこと」は文學のふるさとであり、人間の故郷である。

「まこと」から出て、「まこと」にかへるのが日本文學の道であり日本人の道である。この「まこと」に於て文學も宗教も道徳も一になり得るのである。萬葉集を通して、文學と宗教と道徳と

の一になつた境地が見られ、日本人の理想や道が實現されて居るのも、萬葉集がこの「まこと」を根柢として居るためである。さうして萬葉集に於てもこの「まこと」の根柢の上になつて、日本人としての道や理想のより具體的な方面が實現されてゆくのである。

註

つぎねふ 山城道を 人づまの 馬より行くに おの夫し 徒歩より行けば 見るごとに
ねのみし泣かゆ そと思ふに 心し痛し たらちねの 母の形見と 吾が持たる 眞澄鏡に 蜻蛉
領巾 おひなめ持ちて 馬買へわが春

反 歌

馬買はゞ妹かちならむよしゑやし石はふむとも吾は二人ゆかむ（卷十三）

二 萬葉集と敬神

前節に萬葉集に於ける「まこと」についてのべたが、次にその具體的な一方面として敬神の精神を中心にして申上げたいのである。萬葉集を讀んでいくと神をうたつた歌が多く見られる。さうして神を敬ふ心が至る所に見られるのである。この神を敬ふ心持が「まこと」の心の發露として見られるのが萬葉集の神の歌である。

さうして萬葉集に於て見られる神は民間信仰の對象となる精靈や自然神もあるが、最も崇敬される神は日本國家を作られた神であり、國家の祖先神にあたられる神である。日本國民の最も敬ひ信仰する神は天照大御神であることは古から變らないのであるが、萬葉集に於ても同様である。

萬葉集に於ける最大の歌人柿本人麿には殊に神をうたつた歌が多く見られる。彼は長歌を多くうたつて居るが、その歌のはじめには常に高天原に於ける神々の國家建設に就いて語るのである。

さうしてかくの如き神々によつて作られた國家、その國家を作られた神の御すゑが治めたまふ國家をたゞへまつるのである。

この國家を作られた祖先神を最も崇敬するのは日本の國がらに於てはじめて見られるのである。伊勢神宮が國家の最も高く最も貴い神社であらせられることは、この思想にもとづいて居るのである。他の國に於ては神の信仰と忠君愛國の精神とは必ずしも同一ではない。日本に於ては敬神と忠君愛國とは全く同一になるのである。

さうして國家を創造された神の御すゑである天皇は現御神であらせられるのであつて、柿本人麿の歌には天皇を現御神としてたゞへる思想が常に見られるのである。人麿の歌に常に見られる言葉に

やすみしゝわが大君神ながら神さびせすと

といふ言葉がある。「やすみしゝ」は安くしろしめす意であり、わが大君は天皇をさして居るのである。神ながらは、神なるまゝにといふ意である。語源的に言へば「ながら」は「のから」